

「あそびうた・わらべうた」を通した コミュニケーション能力の発達についての一考察

國光みどり 小林美佐子

(神戸女子大学附属高倉台幼稚園)

キーワード：あそびうた・わらべうた コミュニケーション能力

I. 問題と目的

幼稚園教育要領の領域「表現」は、音楽や身体表現や造形などの表現媒体を通して行われる活動である。その中でも、音楽によって幼児の情緒は豊かになり、安定すると共に、知的発達、語彙数の獲得や身体機能・運動機能の発達、社会性の発達にも貢献する。

ゴダード・ゾルターン（1882 - 1967 ハガリー）は、教育に関する論文「保育園における音楽」の中で、幼児期（3歳～7歳）の音楽教育が重要であると述べ、わらべうたを活用している^①。そこでは、歌うことと身体運動との有機的関連を目指し、聴くこと、澄んだ美しい声で歌うこと、他者と声を合わせることで音楽の基礎を養う^②と考えられている。

こうしたわらべうたには、教師のピアノ伴奏により歌唱指導した歌を歌うことでは得られないものがあるのではないかと考え、幼稚園での普段での遊びや劇遊び、外遊びの中で意識的にあそびうたやわらべうたを取り入れる活動を試行している。

研究目的：あそびうた・わらべうたを通してコミュニケーション能力の発達について考察する。

II. 研究方法

1. 質問紙調査及びアンケート

私立A幼稚園の教師 16名

私立B保育園の教師 15名

分析：DVDを観察し、目的に照らし合わせて読み取りを加え、共通性・相異性に着目し整理・考察した。
教師の感想、実践記録を下に、反省・研修し評価した。

2. 劇遊びの中でのわらべ歌遊びの場面

「こぎつねコンどこだぬきポン」5歳児（年長）

（1）「つんつんつばき～だあれにあげよ」

「あのこにあげよ」

（2）なべなべそこぬけ

（3）「おちゃらかほい」

3. 用語の定義

わらべうた：わらべうたの定義、分類、表記は、諸説あり様々であるが本研究では以下のように用いた。わらべうた（童歌・童唄）とは日本の伝承童謡（自然童謡）、子どもの民族音楽である。ここではわらべうたを、

言葉と動きを伴った遊び歌と定義する。分類は、「赤ちゃんの遊びうた」「幼い子の遊びうた」「みんなと遊ぶうた」を参考にした。また用語は「わらべうた」として用いた。

III. 結果

- 子ども達自身が相手を探し、他者とのタイミングやテンポを自ら判断しながら、遊びを通して他者を意識していく。時には自己抑制や葛藤を味わうこともある。
- 遊びながら身体の動きや言葉のリズムを子ども同士が取り入れていく。相手とシンシンシップをとることで、相手の息遣いや動作のタイミングを感じ、互いに合わせて遊ぼうとする。
- 子ども同士の観察力、判断力、表現力などのかかわりが向上し、子ども達自身が自発的・主体的に取り組もうとした。
- 他者を思いやる優しさや協力することの大切さや喜びなどを感じ、コミュニケーション力・社会性が促進されたのではないか。
- ピアノ伴奏の歌は、教師の技術や曲想にあった弾き方によって歌う傾向にある。

IV. 考察

コミュニケーション能力の発達

1. 音楽と言葉と動きが一体となり、一人一人の子どもが、他者の気持ちや動きを感じ、互いに合わせようと考え共に創りあげていく遊びである。友達との一体感や達成感・充実感が味わわれ、子ども達の自発性・主体的な遊びとして発展していく。その過程において、運動機能や身体機能の発達にも繋がる。

2. あそびうた・わらべうたの遊びは、子ども達同士の相互のかかわりを通して、コミュニケーション能力や社会性を向上させていくと考える。日常の自分たちの生活の中で、自然とあそびうたやわらべうたを取り入れ、子ども達同士が自らかかわり、試行錯誤しながら創りだしていくことがコミュニケーション能力を高めることに繋がるのではないかと考える。

参考文献：

- 『ゴダード・ゾルターンの教育思想と実践』全音楽出版社
『人格の発達に寄与するわらべうた遊び』in 尾見 2000B 秋山治子
『幼児の集団遊びとしてのわらべうた』in 尾見 1999